

死神から衝撃の宣告を受けたあかねは、後日、急いで東強大の勇二パパのもとへ訪れた。蘇生実験をどうしても今夜してくれと頼んだ。突然の要望をいぶかしがる勇二パパであったが、何とか押し切ることに成功した。

あかねは、その足で、すぐに毘沙門寺を訪問した。急遽、今夜蘇生実験を行なうことになったこと、死神が魂を取りに来るのが今日であって、もう時間の猶予がないことを説明する。

阿門「前にも言ったように、魂を入れ替える秘法を行えるのは阿沙梨様だけなんだよ。一介の僧たる俺達にはどうにも…」

だが、後のないあかねは引き下がるわけにはいかなかった。そこへ、運よく阿沙梨様が現れてくれた。毘沙門寺の大御所であるお爺さんだ。正式な呼び名は、**阿沙梨小田慈州大僧正様**だ。

阿沙梨「いや、たとえ元の肉体に戻れても、この世に留まることは出来んなァ」

事情は既に阿門達から聞いているという。だが、一度死んだ人間は「銀の糸」が切れているので、元の体に戻っても生き返ることはできないのだという。銀の糸とは、肉体と魂をつなぐもので、これが切れた状態が「死」なのである。あかね達が出会った死神は、仏教では「俱生神^{くしやうじん}」と言い、彼が現れた以上、糸が切れていれば強制的に靈界に連れて行かれることになる。

あかね「じゃあ、元の肉体に戻っても、すぐあの世行きてって訳か!？」

阿沙梨様は、ひとつだけ裏ワザがあるといった。密教に伝わる、息災法というものを施せば、7日間だけこの世に留まることができるという。

明「で、でも7日間だけなんて…」

あかね「今夜死んじまうよりはいいじゃねえか!」

あかねは、阿沙梨様にその秘法をかけるよう懇願した。

その夜、東強大では、勇二パパが蘇生実験を開始した。コールドスリープを解除し、微電流を流し込む。

時を同じくして、毘沙門寺では、阿沙梨様を中心に息災法の儀式が始められていた。あかねと明は、座敷に横たわっている。霊火にむかって、阿沙梨様がお経を唱える。最後に気合を入れると、二人のからだから、勇二・あかね（本来）・早池峰の魂が分離した。

だが、ここでアクシデントが発生した。勇二の体が急激に引っ張られ、別の次元に吸い込まれてしまったのだ。阿沙梨様はなんとか本格的に吸いさられてしまう前に横道にそらすことに成功したが、早く引き戻さないと大変なことになってしまいます。

勇二の魂は、ある道路に飛び出た。

勇二「な、なんだここは…!？」

すると、向こうからセーラー服姿のあかねが歩いてくる。顔立ちも少し幼いようだ。

勇二「ま、まさか、あかねが事故で死ぬ前の時代にタイムスリップしたんじゃ…!？ま

「いっちゃったなア・・・どうすべえ？」

すると、あかねの行く先には暴走族が待ち構えていた。

暴走族「カノジョーいっしょに遊ぼうよー！」「ひゃっほー」「はっはー」

暴走族はあかねに襲い掛かってきた。涙を流しながら必死に逃げるあかねだったが、バイクに乗っている彼らには簡単に追いつかれてしまった。勇二は暴走族を殴ろうとするが、霊体なので虚しく空振りするだけだ。

あかねは、地面に押し倒され、服を破かれた。このままでは強姦されてしまう！



勇二の執念が勝った！勇二はまさかの霊体から実体となることに成功し、あかねに馬乗りになっていた暴走族を激しく蹴り飛ばした。他の男達が勇二に襲い掛かるが、勇二に対しては彼らの攻撃は空振りする（なぜ・・・）。勇二は一方向的に彼らをタコ殴りにし、暴走族を追い払うことに成功した。



勇二は、若かりしあかねの手を引いて起こした。

勇二「あかね、ケガはなかったか？」

あかね「は、はい。ありがとうございました」

あかねはハッと気づいた。

あかね「どうして私の名を！？」

勇二「あ！い、いや、それはその…そうだ！そんな事より、お前3年後、事故に気をつけろよ！」

あかね「はア？」

こちらの世界では阿沙梨様が焦っていた。

阿沙梨様「いかん…これ以上、あの男が未来の事を話してしまったら、因果律が崩れてしまう！」

阿沙梨様は気合を入れ直した。あかねと話していた勇二の体が宙に引っ張られ、再び次元に吸い込まれた。若かりしあかねは、ポカーンと立ちつくすのみだった。

阿沙梨様の秘法は成功した。

麗華助手「教授…！」

勇二パパ「おお…！！」

勇二・あかね・早池峰は、各々の本来の体に戻って蘇生することに成功した。

後日の弁天堂大学ラグビー部グラウンド。

日本選手権（大学優勝チームと社会人優勝チームが日本一をかけて試合をする）が近いというのに、あかねと早池峰が近日姿をみせていないことに、監督はブツブツ言っていた。監督が読んでいた大都スポーツ新聞には、社会人チーム・無敗の神鋼がついに破れ、サンポリーが社会人リーグで優勝したという記事が踊っていた。サンポリーがなぜそこまで強くなったのか。それは、あの朝倉が入ったからだ。

勇二「へえっ、本当かよ！」

ベンチに座る監督の背後から勇二が声をかけた。

勇二「よっ！」

監督は当然、現実が理解できなかった。まだ優勝ボケが残っているだけの、急に走り出して転ぶなどしたうえで、勇二が本当に幽霊でないということを認識すると、号泣しながら抱きついて喜んだ。

そこにあかねと早池峰もやってきた。

勇二「よかったア。お前達も成功したんだな」

あかね「私…思い出したの。4年前、私を助けてくれた謎の人のことを…あなただったのね…あの日以来、私の心の中には、あなたの影が住んでいたのよ」

そう、あかねが朝倉と別れる原因となった、あかねの心の中にいた、謎のラガーマンこそ、次元を飛び越えてあかねを助けた勇二だったのだ！この話は一卷にさかのぼる。そこまで含めての因果律だったのだ。長い話の最後に伏線をきっちり回収する、作者の手腕に脱帽だ。

あかね「やっと…やっと会えた…」

あかねは勇二の胸に顔をうずめた。

勇二「そう言えば、お互い自身の体で会うのは初めてだよな」

だが、残された時間は7日間だけ。勇二はキッと空をにらんだ。

残された7日間、3人はどう過ごしたのだろうか。

あかねは実家に戻った。若干緊張気味にドアをあけ、母の胸に飛び込むあかね。

あかね「お母さん…ただいま」

あかねの母「ど、どうしたの？やあねえ。まるで久しぶりに帰って来たみたいじゃないの」
親としては、毎日あかね（中身は勇二だった）とは顔をあわせていたので、違和感をおぼえるのも無理はない。

この日はあかねの22歳の誕生日だった。2年前に突然、弁天堂大学に編入したいと言い出したことなどを話のタネにしながら、歓談する両親。あかねは、自分があと7日間しか生きられないということを、心の中で両親に謝罪し、涙するのだった。

早池峰は、美雀会で、栗果と結婚式（和式）と総長就任式を挙げていた。

早池峰「いいかあ、てめえら。美雀会三代目総長就任ならびに結婚式は全て完了した！！
これからは、この早池峰明が三代目総長だ！いいか、俺にもしものことがあったら、この栗果を総長代行として仰げ！これは俺の遺言だと思え！！」

部下ヤクザ「遺言…？」

早池峰「万一の場合だよ」

だが、早池峰自身、それが一週間後に確実に起こる万一であることを認識していた。

勇二は、監督と飲んでいた。ほっぺたを何度もつまみ、勇二が活着していることを確認して喜ぶ監督。勇二は、東大教授の父のおかげでコールドスリープから蘇ったのだと説明した。そして、本題を切り出した。

勇二「ところでカントク。一週間後の日本選手権に、俺を出してくれねえかな」

父がいずれ復活することを見越して休学届を出しておいたから、学生登録は抹消されていないのだ。監督はこれを快諾した

翌日のラグビー部の練習。監督は、織田勇二がSOに入り、これまでSOだったあかねをSHに回すことを部員に説明した。

いくら以前に主将をやっていたからといって、いきなり知らない奴が入ってきてもチームプレーをできるはずがないと、風馬や六角が主張した。

勇二は少し考え、風馬のもとへ歩み寄った。

風馬「な…なんだ、やろうってのか！？」

勇二「風馬…お前んちの…置屋の芸者^{おねえちゃん}元気か！？」

勇二は耳元でボソッとつぶやいた。

風馬「なっ…なんでウチが置屋だって知ってんだ！？」

勇二「お前らの事は何でも知ってるぜ。プレーのサインや個人のクセまで…俺以上に弁大ラグビー部の SO にふさわしい奴はいねえと思うけどな」

ランポー「おい、なんかあいつ、初めて会ったような気がしねえんだよな…」

六角「ああ、俺もだよ。まるで、ついこの間までいっしょにいたような感覚をおぼえるんだよなア!？」

なんでそれだけで説得できるのかはよくわからないが、ともかく部員達は、勇二を SO として迎え入れた。

練習の帰り道、勇二とあかねが歩いている。

初顔合わせの勇二とサインプレーのタイミングがピッタリあっていて、皆がキョトンとしていたことを、勇二は笑い話にしている。あかねが神妙そうに言った。

あかね「ねえ…セックス…しようか」

まあ、そうなりますよね。

あかねがシャワールームから出てきた。

あかね「…今さら、私の裸なんて見あきたでしょ？」

勇二「い、いやそのなんつーか…こうして第三者の目から見るのは初めてなもんで…今、あらためて今まで自分が使っていたからだがかんないにもキレイだったのかって、再認識したよ」

そして、勇二とあかねはまぐわった。あかねはバージンだった。

あかね「よかったあ…私、まだバージンだったんだ」

勇二「当たり前だろう。俺が男と寝るような事するわけねえもん」

あかね「ううん。誰かさんがこの体をラグビーで酷使してくれたから、バージンなくしちゃったかと思って」

あかねは、自分のお腹に手を当てて、何か考えていた。

あかね「…赤ちゃんて受精して三ヶ月経たないとわかんないんだよね？6日間じゃダメかなア…」

あかねは、昨日誕生日を祝ってくれた両親のこと、そして 6 日後にあかねが世から消えたら、どれだけ彼らが悲しむかを語った。

あかね「せめて、私のかわりに赤ちゃんでも残せたらと思ったんだけど…」

だが、6日間で赤ちゃんができる訳がない。だが、勇二はハッと気がついた。

勇二「ひとつだけ方法があるっつ!!行こう、あかね!」

6日後、場所は国立競技場。日本選手権、弁天堂大学 vs サンポリーの試合は大詰めを迎えていた。

勇二は皆と呼吸がピッタリ合ったプレーをみせる。勇二が突進して落としたこぼれ球を拾って、六角がトライ。ここまでで弁天堂大学 14-20 サンポリーのスコアだ。

客席には近藤もいる。

近藤「それにしても、まさか勇二が生きていたとはなア・・・」

東強大では、勇二パパがTV観戦していた。

勇二パパ「勇二の奴・・・いったい、何を考えておるやら・・・」

6日前のことだ。勇二とあかねは何かを父に一生懸命頼んでいた。

勇二パパ「しかし、そんな事せんでも、お前達の若さならこれからいくらでも・・・」

勇二「い、いや、どうしても今すぐじゃないとダメなんだ！」

勇二パパ「? コールドスリープから目覚めたと思ったら、いきなりとんでもないことを言い出しおって・・・」

二人は何を頼んだのだろうか。

一方の試合。早池峰から、あかね（本来）にパス。明慈のOBであり、今やサンポリーのエースプレイヤーである朝倉が指示を出す。

朝倉「来るぞ。ウイングステップだ。左右を固めろ!!」

だが、あかねは、直前で勇二にスイッチパスをした。

朝倉「なにィ」

意表をうまくついた勇二は、サンポリーディフェンスを突破。ゴール前5mで、敵のFBとWTBが潰しにかかってきた。ここで、



勇二がウイングステップを決めた！魂が元に戻っているのだから、当然といえば当然だ。そのままトライ。

監督「ゆ・・・勇二がウイングステップを・・・!？」

最後のゴールキックを残して、弁天堂大学 19-20 サンポリー。

キックは勇二自身が蹴る。力を込めて…蹴った！その瞬間、勇二・あかね・早池峰の意識は暗転した。意識が暗闇に飲み込まれる中、ボールがゴールポストを通過していった。

弁天堂大学、日本一だ。

グラウンドでは、3人が同時に倒れた。騒然とする周囲。

霊体となった3人は上空からこの様子をみつめていた。

勇二「なんとかタイムリミットギリギリで間に合った」

早池峰「ああ」

勇二「ほんじゃまあ、あの世とやらに行きましょうか？」

あかね「ええ」

3人は上空へと昇っていく。だが、ここで死神が現れた。

死神「ちょっとお待ち下さい。ふえっふえっ、まさか密教の秘法で7日間も延命するとは、なんとも往生際の悪い人達ですね。本来ならば、もうこれであなた方を霊界に連れて行かねばならないんですが、2年以上も霊界の法則を破って現世に留まっていたことで、上の方々はすいぶんとお怒りですてねえ…あなた方には、特例として懲罰が下されました」

むしろ、お前が早く迎えに来てればよかったんじゃないのか？

勇二「懲罰？まさか地獄に…」

死神「いえいえ、このまま現世に留まっています。つまり、霊界の法則を破った罰として、常世での安息は許さず、もう一度俗世で生老病死苦を味わい、魂の修行をせよ！…と、こういうお達しなのですよ。あそこにみつつ光るものがあるでしょう。あれは、これから生まれる新しい生命です。それに、それぞれ転生して頂きます」

こうして、死神は「ほうれ～」という掛け声とともに、手に持って開いた黒い傘をグルグルと回転させ、3人を下界に吹き飛ばした。

1年半後。

あかねの両親が、赤ちゃんを抱いて弁天堂大学を訪れていた。

あかね母「初めてですねェ。私達がここに来るのは…」

あかね父「そうだなァ」

また、栗果もヤクザを引き連れて訪れていた。

栗果「いい？あんた達はここで待ってなさいよ」

ヤクザ部下「へいっ」

3人は、グラウンドの監督のもとへやってきた。監督は、あかねの両親とその腕の中にある赤ちゃんをみて、合点がいったようだ。

監督「じゃあ、その子が例の…？」

あかね母「勇二さんとあかねの子供です」

そう、勇二とあかねが死ぬ直前に父に頼み込んでいたのは、人工授精だったのだ。

あかねの両親「この子が、私達にはなんとなくあかねの生まれかわりのような気がしまして…ですから名前も‘あかね’にしました」

栗果も赤ちゃんを抱いていた。

栗果「あたしのコレも、‘明’にしたんですよ！ほら、目元なんか明さんにソックリ！」

赤ちゃんを「コレ」呼ばわりするなよ。栗果のことだから、子育てちゃんとできているか不安になる（笑）

監督「ふふ…そうかそうか。いや、実はワシもな…」

そこへ、みずほがやってきた。

みずほ「パパーお弁当持ってきたわよォ」

監督「おお、みずほ！」

そして、みずほが抱えてきた赤ちゃんを、監督は取り上げて言った。

監督「ワシの所も、コレの名を‘勇二’にしたんだぎゃ！！」

栗果「でも、まさかカントクとみずほが結婚しちゃうなんてねェ。大体アンタ、レズじゃなかったの！？」

みずほ「でへへ…」

なんと、監督とみずほが結婚していたのだ。まさに**美女と野獣、歳の差婚**だ。ところで、この二人は人工授精じゃないだろうから、普通に子供ができたことになる。

勇二達が死神に転生を命じられた時点で、新たな命が芽吹いていたことを考えると…**大学選手権の祝賀会で、泣き上戸の監督にみずほが母性本能をくすぐられた後、割とソッコーだった**ということがいえるだろう。監督も**スミに置けない男**だ。

栗果「この子達が、このグラウンドでラグビーをする日が来るかしら？」

監督「それには20年待たんといかんが…この子達が、あかねと勇二と早池峰の生まれかわりだとしたら…」



ノーサイド、完結！

ぶっ飛び系設定の漫画でありながら、最後はホロリと泣ける。

死に始まり、最後は新しい生命で再スタートするというテーマ、その他にも本来のラグビー精神に留まらないノーサイドの考え方など、深い話が盛りだくさんのラグビー漫画の名作は、ここに幕を閉じたのだった。